

■ 研究ノート ■

## 関西地域のビジネス・コミュニケーション における方言の仮想度

吉井雄樹\*

### はじめに

現代は方言をポジティブに受け入れる時代である。現代の方言の在り方の特徴的な現象として、方言のコスチューム・プレイなどが研究されている。一方で、現代におけるビジネス場面の方言の仮想の度合いを概念化したものは管見の限り多くはない。本稿では、公的な要素を含むビジネスでのコミュニケーションにおける方言の仮想の度合いを「武器化」や「ビジネス方言」などの用語を用いて指摘し、「仮想方言」の研究に関する議論に新しい視点をもたらすことを目指す。

### 1 方言威光時代までの変遷

真田（2000）は、標準語前史から現代までを4つの時期に分類している。4つの時期はそれぞれ、近世における標準語の「前史」、近代の標準語政策において方言が撲滅される対象となった「登場期」、第二次世界大戦後、マスメディアを通じて方言と全国共通語の使い分けがほぼ完成に至った「完成期」、バブル崩壊後の現代において、バイリンガル状態が完成した「ポスト期」である。

方言の社会的価値は時代につれて変遷してきた。田中（2016）によると、標準語政策があった登場期では、「方言」は「標準語」に比して「劣るもの」で「恥ずかしい」ものとして認識された。木部ほか編（2013）は、方言に関する1960年代から2000年代の代表的な新聞記事を示している。完成期の最中である1970年代までは「方言殺人」や「地方人侮辱」などの否定的な新聞記事の内容が目立つ。1980年代以降になると、方言の良い面に注目するようになる。続く「ポスト期」の1990年代では「多様化社会の象徴」や「ビジネス場面における効能」などが目立つ。2000年代以降からは「女子高校生方言ブーム」を取り扱う記事も出てくるようになった。

小林（2004）は全国共通語化が進むことで方言の社会的価値が上昇したと指摘し、田中（2016）は方言のポジティブな受容の在り方を「方言威光時代」<sup>2)</sup>としている。

\*関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士課程前期課程

1) 同時期、アメリカ・マサチューセッツ州に位置するマーサズ・ビンヤード島で行われた1963年の調査では、標準語に反発することで同じ言語共同体の連帯感を高める「潜在的権威 (covert prestige)」があることが指摘されている (Labov 1972)。

2) 田中（2016）は「方言プレステージ時代」と呼び、「プレステージ (prestige)」を「威光」と示している。そのほかの研究では「権威」と表記されることもある。本稿では、田中（2016）のいう「プレステージ (prestige)」を威光とし、そのほかを権威と区別する。

## 2 仮想方言の3つの層

方言威光時代の特徴的な現象に「コスプレ方言」がある（田中 2007）。コスプレ方言とは、「親しい間柄のおしゃべり」で現れる「ことばによるコスチューム・プレイの方言バージョンである」（田中 2007：123）。コスチュームされる「方言」には正確さは求められず、「〇〇弁」として共有される「らしさ」が感じられる使用である。田中（2016：vi）は、これを「特定の地域と結びついたリアルな生活の中で使われる素の言葉」とは違い、何らかのレベルで調整された「仮想方言（ヴァーチャル方言）」と呼んでいる。仮想方言には、最低でも、以下のような3つの層があると指摘されている（田中 2006）。

第一層：自分の生育地の方言で自分自身がふだん使用している方言

第二層：自分の生育地の方言だが、自分は使用しておらず祖父母世代が使用しているような「より濃厚な方言」

第三層：自分の生育地でもない他地域の地域方言

第一層の使用は「生育地方言」である。生育地方言の生育地とは、一般的に5歳から15歳までの言語形成期を過ごした地域の方言のことで（田中 2007）、田中・前田（2012：124）では「15歳までに一番長く生活した地域」を「生育地」とみなしている。生育地方言は、「自分の生育地の方言」で「ふだん使用している」ため、「本方言（リアル方言）」と呼ばれる。ただし、「システム（言語体系そのもの）」としての伝統的な方言と区別されるべきである。なぜなら、現代の方言は、たとえ生育地の方言であったとしても、全国共通語と使い分けることを前提として使用される「スタイル（私的な場面で使用される一種の文体）」に変化している点で現代的な方言使用である（小林 2004：106）からである。さらに、現代では、生育地方言が同じ方言を話すかどうかに関係なく親しい人に対して使用される「親密コード」となっている。また、全国共通語を基盤にして、方言の文末詞や感情語彙、程度副詞などの部分的な心理的要素として用いられる「アクセサリー化」が指摘されている（小林 2004）。アクセサリー化した方言は、次の「ジモ方言」の前段階的な用法である（田中 2006）。

第二層と第三層は、第一層の本方言に対して仮想方言と呼ばれる。仮想方言の「仮想度」（田中 2018）は、田中（2016：vi）のいう「特定の地域の結びつき」と「リアルな生活における使用」のある「素の言葉」からの解離度から説明できる。

第二層の使用は「ジモ方言」<sup>3)</sup>である。ジモ方言は、「自分の生育地の方言」という点では本物であるが、「自分が使用しておらず祖父母世代が使用している」ため「リアルな生活における使用」ではない。そのため、「より濃厚な方言」は仮想的に調整された方言である。「祖父母世代が使用しているような」方言とは、伝統方言のような地元らしさがより濃厚に感じられる方言のことである。

3) 1990年代の流行語で地元人を意味する「ジモティ（ジモト+*-ee*）」の略である（木部ほか編 2013）。

第三層の使用は偽方言である。偽方言は、「自分の生育地の方言」ではないため、「特定の地域の結びつき」、すなわち「地元性」(田中 2006)がない。さらに、偽方言は「リアルな生活における使用」もないため2重に仮想的である。

上述の通り、これまでの多くの仮想方言の研究は日本大学教授の田中ゆかりによる貢献が大きいの。それゆえ、多くの先行研究が日本大学のある首都圏の大学生などを対象にした調査に基づくものであった。これらの研究は、1990年代半ば生まれで生育地が関西地域である筆者には、強く共感できる点と引っ掛かりを感じる点の両方があった。なぜなら、方言の存在をあまり意識しない首都圏では偽方言で「遊ぶ」という傾向があることに対し、私生活の多くの場面で方言を使うことを意識する関西地域では、地元の方言を「武器」として使う傾向があると思われるからである。これまでの調査では、関西方言が仮想的ではないとする主張はあったが、仮想方言の3層における位置づけに言及したものは管見の限り見当たらない。したがって、次章からは、「武器」としての方言の使用が顕著に表れることが推測される「ビジネス・コミュニケーション」における関西方言の仮想度を検討する。

### 3 関西地域のビジネス・コミュニケーション

ビジネス・コミュニケーションは日常会話と異なる性質を持つ。ビジネス・コミュニケーションの先行研究では、「日常会話とは異なる公的な性格および、相互理解と人間関係の重要性が指摘されている」(李 2002: 246)。日常会話と異なる点は、『『行為』として実現させる『社会的』責任』(高見澤 1994: 30)と「言葉によって事柄を伝え、自己の意見を示し、相手を説得するという言語行動が基本となっている世界」(水谷 1994: 16)にある。使用範囲や使用相手は職場によってさまざまであることが期待されるが、基本的に言語側では丁寧な形式が選択されることが考えられる。また、「相互理解と人間関係の重要性」からは、相手への配慮が求められる場面であると思われる。そのため、言語側と使用側の状況において「公的」(鏑水 2014)であるといえる。

従来、方言の使用は私的な場面であるとされてきた。しかし、関西地域は方言敬語が発達しているため、方言敬語を用いることで言語側の丁寧な形式の選択ができる。方言敬語は、「目上意識」と「親しみ」を同時に生み出せることが指摘されている(陣内 1996)。関西地域にある個人商店について、真田・金(2004)は「ハル」を用いた方言敬語から親しい態度が表現されると指摘している。ビジネス場面においても、吉岡(2011)は親しさと敬意の両方が示せる方言敬語が有効だとしている。そのため、関西地域では、ビジネス・コミュニケーションにおいて方言が使用されることが考えられる。

### 4 職場における関西方言の仮想的使用の示唆

これまでの仮想方言の調査の多くは首都圏で実施されてきた<sup>4)</sup>。しかし、関西地域では方言があ

4) 田中(2005, 2006)や田中・林(2016)は主に首都圏の私立大学に通う大学生の友人同士の携帯メールやスマートフォンを用いた「打ちことば」に使用される偽方言などを調べている。

ると強く意識されているため、これまでの調査されてきた方言があるとあまり意識されていない首都圏とは方言に対する意識が異なることが考えられる。大きな違いの1つに、関西地域ではヨソの地域の言葉をわざわざ借りなくても地元の言葉を使うことで親しさを表せることが考えられる。田中（2007）は、本方言とジモ方言は非首都圏出身者の使用が多いとしている。この調査で提示された場面は私的な場面に限定されているが、関西地域では公的な場面においても仮想方言が使用されると考える。

例えば、職場における仮想方言についての示唆的な記事もある。ポスト期とされる1990年代には、ビジネス場面における効能を謳う記事が登場している（木部ほか編 2013）。この記事では、職場で注意を与えるときには冷たく聞こえないように「共通語」から「大阪弁」に切り替えるという内容が記述されている。田中（2016）は、この時期の記事について、これまでのウチとソトに対応していた方言と全国共通語の使い分けとは異なり、場面やキブンに従い演出的に用いる方言コスプレの用法<sup>5)</sup>につながる感性がみられるとしている。そのため、関西地域では親しい間柄のおしゃべりでされるような遊び要素以外にも、職場などの公的な場面において使用されることが考えられる。

公的な性格を持っているビジネス・コミュニケーションの仮想的な方言使用の示唆として、東（2009）のコード・スイッチングの考え方がある。東（2009）は、コード・スイッチングの研究を拡大解釈し、これまでバイリンガル話者の2言語以上の切り替えを説明するコード・スイッチングを同一言語内の「コード」<sup>6)</sup>の切り替えに応用している。そして、現実では親密ではない人間関係を仮想的にウチの関係に仕立て上げられる「秘密の武器」として、ソトの関係の人にあえてウチのコードに切り替えることを示唆している。

## 5 「武器化」現象

本章では、ビジネス・コミュニケーションにおいて現代方言が武器のように使用される「武器化」現象を指摘したい。ここでいう「武器」とは、刀や弓矢のような戦いのための道具としての武器ではなく、何かを行うための有力な手段となる武器のことである。つまり、ビジネス・コミュニケーションにおいて方言威光の強みを有力な手段とする方言使用のことである。武器というネーミングは方言をアクセサリーのように遊び感覚で着脱するだけではなく、方言の威光をまとい戦略的に用いるという意味合いを含む。先行研究では武器という言葉について深く言及されることはあまりなかったが、一般書籍においては方言を武器と記述することは少なくない<sup>7)</sup>。また、武器として

5) 3つの用法があるとされる。大きく、地域用法とキャラ用法があり、地域用法には話題と話し手の地域性を提示するものがある（田中 2016）。

6) 東（2009：14）はコードを「『言語』、『方言』、『話し方』（スピーチスタイル）のこと」としている。

7) 例えば、清水著の2010年出版『清水克衛流一瞬で忘れられない人になる話し方30のコツ』では、「方言という武器」という記述があり、その章には「自分の出身地の方言で営業してみよう」とある。三浦著の2011年出版『勝率90%超の選挙プランナーがはじめて明かす心をつかむ力』では「方言という武器」という章がたてられ、「誠実で朴訥なキャラクターの演出」になるとしている。箱田著の2016年出版『たった一度で絶対覚えてもらう印象力5倍アップのツボ』では、方言のポジティブにとらえられた「『方言』こそ最強の武器だ」という章があり、「意図的に方言を使う」ことを提案している。

の「方言」は方言と全国共通語のバイリンガル状態を前提とした第一層、もしくは本方言と仮想方言の中間層に位置すると思われる。

これまで指摘されてきた中間的な現象として、全国共通語を基盤とした着脱可能で部分的な方言使用のアクセサリー化がある（小林 2004）。

公的な場面における方言の実態に言及したのものとしては加齢に伴う方言の使用を調べた村中（2009）がある。加齢の中で大きな変化といえるのが、大人になってから生じる「新たな人間関係」である。新たな人間関係とは、「職場の同僚」や「取引先・得意客」などの「縮められない距離がありながらなおかつ距離を縮めようとする人間関係」のことである（村中 2009：94）。例えば、村中（2009：95）は同僚との場面を「標準語ではなくどうしても方言で話したい場面」とし、以下のように説明する。

同僚は、職場という公的な場面で会う存在である。プライベートの友人ではないことが多いだろう。しかも、年上であれば、丁寧に待遇することが要求される。しかし、頻繁に会う相手であるから、ある程度の親しさは必然的に生じている。そのような「丁寧さ」と「親しみ」とを同時に表したい相手に対して、方言で話す強力なニーズがある、ということである。

そして、村中（2009）によると、大人は2つのスタイルを使い分けるとしている。1つは「日常ツールとしてのスタイル（以下、日常スタイル）」、もう1つは「非日常ツールとしてのスタイル（以下、非日常スタイル）」である。日常スタイルは、「デスワ」や「マスワ」などの「デス・マス＋方言の文末表現」や「ハル？」などの「デスマス抜きだが丁寧な質問形」のことである。非日常スタイルは「デンナー」や「マンナー」などの「デス・マス＋音声転訛した方言の文末表現」や「オーキニ」などのいわゆる「濃い大阪弁」や「大阪弁の強烈バージョン」、「コテコテ」といわれるものである。

これらの大人のスタイルは、話し相手志向と場面志向の要因があり、前者では親しみを表すために、後者ではくつろいだ雰囲気作りのために方言文末詞が使用される。この方言使用は小林（2004）の指摘する方言の現代的機能と重なるところがある。小林（2004）と村中（2009）の大きく異なる点は、村中（2009）で主張されるものは公的な場面であるため、丁寧さが求められる場面や疎遠な人間関係との場面でも、大人のスタイルが戦略的に使用されるところにある。

村中（2009）は仮想方言について言及していないが、非日常スタイルは、田中（2006）のいうジモ方言と、強調された「より濃厚な方言」という点で一致するといってもいいだろう。しかし、ジモ方言が「リアルな生活における使用」ではないのに対し、非日常スタイルは「リアルな生活」を「日常」と「非日常」の2つに分けているところに違いがある。つまり、非日常スタイルは日常会話とは異なる性質を持つビジネス・コミュニケーションなどの「リアルな生活における使用」である。そして、新たな人間関係における方言の高い需要から、仮想的にウチの関係を作り上げる「秘密の武器」としての潜在的な言語レパートリーであると同時に、年を重ねると使いこなしが促進される。したがって、「リアルな生活における使用」が全くないとはいえないが、非日常生活に限られた「より濃厚な方言」である。これは、ジモ方言に比べて仮想度が低く、生育地方言よりは仮想

度が高い。この点で、非日常スタイルは中間層に位置しているといえる。

武器化現象は職場に限った現象ではない。例えば、村中（2017）と二階堂（2019）の調査がある。村中（2017）は、高度に公的な場面<sup>8)</sup>である国会の議事録を会話資料として取り上げ、「コテコテスタイル関西方言」と呼ぶ「ソウデンナ」などの「デスマス体の音声転訛形」について調べている。国会のコテコテスタイル関西方言は1970年代から1980年代にかけて増加傾向がみられる。コテコテスタイル関西方言を盛んに使用する話者は非引用形として使用する傾向があり、使用が少ない話者は引用率が高い傾向にある。非引用形の場合は、相手を批判する文脈で連続的にコテコテスタイル関西方言を使うことで相手を追い込むパターンがある。引用形の場合は地元の人が話しているかのような臨場感を持たせる効果があり、前後に丁寧な言葉遣いを挿入することで注意深く使用される高度な技であると指摘されている。村中（2019: 183）はこの調査をまとめて、「少なくとも関西人が使う場合は、バーチャルなものではなく、アイデンティティに根ざした言語レパートリーなのではないか」と主張している。二階堂（2019）は、ネット上に公開されている「地方議会会議録」を事例に、福岡県議会における「少し丁寧な方言」が武器のようだと述べている。少し丁寧な方言は、本会議会より少しくだけた場である委員会を確認できる。これは、「ドラマ方言」<sup>9)</sup>とは逆に、「共通語らしく聞かせて敬意を示すために、文末だけ『です・ます』をつける」（二階堂2019: 105）使い方である。特に、行政側と交渉する場において、相手を説得するために距離を詰める手段として方言が「意図的かつ戦略的」に使用されているとしている。これらは、方言スタイルが距離を詰めるための武器として発揮された武器化現象といえるだろう。ただし、仮想度を会話資料などから検討することは難しい。そのため、今後「リアルな生活における使用」であるかを方言話者の意識から調べる必要がある。

以上は、公的な場面における武器化現象を示唆するものであったが、方言の武器化は公的場面に限られたものではないことを強調しておく<sup>10)</sup>。本稿では紙面の関係上、詳しい考察は別の機会に譲ることとする。

## 6 「武器化」と「ビジネス方言」の違い

これまで武器化現象が第一層から中間層における現象であることを指摘したが、本章ではより仮想度の高いジモ方言との違いについて「ビジネス方言」との比較を通して指摘する。太田（2019）

- 
- 8) 国会の性質として国会議員たちの職場であるだけでなく国の政治をつかさどる場であることが考えられ、話題・場面において高度に公的であるとしている（村中 2017）。
- 9) 田中（2011）や金水ほか編（2014）はドラマなどの創作物で登場するキャラクターに与えられた「ドラマ方言」を調べている。
- 10) 2000年代以降、方言を「かわいい」とする感性から生まれた「方言萌え」（田中 2016）を強みとした武器化現象も散見される。例えば、田中（2014）によると、2014年1月号の若年女性向けのファッション雑誌『cancam』（小学館）が「モテ方言特集」を組んでいる。一般書籍においても、ひろん著の2016年出版『女は「いい女」になろうと迷走するけど、やっぱり男は「いいかげんな女」を選ぶんです』では、方言が「強力な武器」と記述されており、ゆうこす著の2017年出版『#モテるために生きてる!』では、「合コン」の場での方言を「モテるためのテクニック」として紹介している。職場と異なる点は、職場ほど合コンの場には丁寧さが求められず、今後親密な関係に発展することが許される出会いの場であることにある。

はNHK連続テレビ小説の『あまちゃん』を考察し、ふだん「標準語」しか話さないユイが、商売をする「方言キャラ」を見せるために、「ごすんばいねく」と方言を話し出すことに言及している。そして、テレビや観光産業でビジネス目的のために誇張される方言が「ビジネス方言」と呼ばれることがあるとし、そのネーミングについて2015年5月18日に日本テレビ系列で放送された『月曜から夜ふかし』という番組でマツコ・デラックスが共演者の村上信五の「関西弁」をテレビ向けに盛ったものだと指摘したことが始まりだとしている。これを、太田(2019)は「スタンス取り」から説明しているが、仮想方言からも説明できるだろう。

武器化とビジネス方言の違いは、ビジネス方言の場合はふだん「標準語」しか話さないため、方言の使用が「リアルな生活における使用」ではないところにある。つまり、ビジネス方言は「リアルな生活」から解離したビジネス用の仮想方言であるため仮想度に違いがある。

## おわりに

本稿では、これまで方言の仮想度の言及があまりなかったビジネス・コミュニケーションにおける方言の仮想度を検討した。方言があると強く意識される関西地域では、方言は一時的な流行りだけではなく、方言威光をいかした武器として使用されていると思われる。方言の現代的機能と大きく異なる点は、丁寧さが求められる場面や疎遠な人間関係との場面で私的なスタイルが意図的かつ戦略的に使用されるところにある。また、仮想的にウチの関係を作り上げるための非日常ツールとしてのスタイルは生育地方言より仮想度が高く、ジモ方言より低い。そのため、第一層と第二層の中間層における武器化現象の1つであると指摘した。今後は、本稿の指摘を踏まえてビジネス場面における方言の仮想度を方言話者の意識から調べるのが期待される。

## 付記

本稿は、2020年9月26日の関西学院大学言語コミュニケーション文化学会2020年度第一回言語コミュニケーション・フォーラムの発表を踏まえている。

## 参考文献

- 東照二, 2009, 『人を惹きつける「ことば戦略」——ことばのスイッチを切り替えろ!』研究社。
- 箱田忠昭, 2016, 『たった一度で絶対覚えてもらう印象力5倍アップのツボ』パンローリング。
- ひろん, 2016, 『女は「いい女」になろうと迷走するけど、やっぱり男は「いいかげんな女」を選ぶんです』大和出版。
- 陣内正敬, 1996, 『地方中核都市方言の行方』おうふう。
- 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ編, 2013, 『方言学入門』三省堂。
- 金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編, 2014, 『ドラマと方言の新しい関係——『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』笠間書院。
- 小林隆, 2004, 「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7(1): 105-107。
- Labov, W., 1972, *Sociolinguistic Patterns*. University of Pennsylvania Press.
- 三浦博史, 2011, 『勝率90%超の選挙プランナーがはじめて明かす心をつかむ力』すばる舎。
- 水谷修, 1994, 「ビジネス日本語を考える——公的話ことばを求めて」『日本語学』13(12): 14-20。
- 村中淑子, 2009, 「関西方言の文末表現について——個人言語と年齢アイデンティティとの関連」『徳島大学

- 国語国文学』(22):96(1)-89(8).
- , 2017, 「公的場面における関西方言について——国会でなぜコテコテの関西方言が使われるのか」『社会言語科学』20(1):176-183.
- 二階堂整, 2019, 「福岡県議会における老年層議員のスピーチスタイル」片岡邦好編『みんなの知らない方言の世界』(愛知大学人文社会学研究所2017年度ワークショップ報告書)95-113.
- 太田一郎, 2019, 「メディアの中の方言——テレビドラマのコードスイッチング」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』86:21-38.
- 李志暎, 2002, 「ビジネス日本語教育を考える」『言語文化と日本語教育』245-260.
- 真田信治, 2000, 『脱・標準語の時代』小学館.
- 真田信治・金美貞, 2004, 「関西圏における接客敬語行動——店舗形態によるバラエティ〈その2〉」『阪大日本語研究』16:37-49.
- 清水克衛, 2010, 『清水克衛流一瞬で忘れられない人になる話し方30のコツ』学研プラス.
- 高見澤孟, 1994, 「ビジネス・コミュニケーションと日本語の問題——外国人とのコミュニケーションを考える」『日本語学』13(12):30-37.
- 田中ゆかり, 2005, 「携帯メールにおける『キブン』表現」『語文』121:131(1)-119(13).
- , 2006, 「メールの『方言』は、どこの方言か」『國文學』51(4):63-66.
- , 2007, 「『方言コスプレ』にみる『方言おもちゃ化』の時代」『文学』8(6):123-133.
- , 2011, 「NHK 大河ドラマと連続テレビ小説からみた『方言』」『語文』139:90(1)-71(20).
- , 2014, 「『方言』が価値をもつ時代——Stigma から Prestige、そして…」『都市問題』105(8):9-17.
- , 2016, 『方言萌え!?——ヴァーチャル方言を読み解く』岩波書店.
- , 2018, 「『方言コスプレ』と『ヴァーチャル方言』——用語・概念・課題」『方言の研究』(4):71-98.
- 田中ゆかり・林直樹, 2016, 「『打ちことば』におけるキブン表現——スマホ Web 調査に基づく程度差のある感覚形容詞の表現」『語文』156:92(21)-82(31).
- 田中ゆかり・前田忠彦, 2012, 「話者分類に基づく地域類型化の試み——全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討」『国立国語研究所論集』(3):117-142.
- 鎌水兼貴, 2014, 「『首都圏の言語』をめぐる概念と用語に関して」『国立国語研究所論集』(8):197-222.
- 吉岡泰夫, 2011, 『コミュニケーションの社会言語学』大修館書店.
- ゆうこす, 2017, 『#モテるために生きてる!』ぶんか社.